# 伝統の家づくりを受け継ぐために，架構をシンプルに。

## 小竹の家

建築設計 ワークショップ「き」組

文 **松井郁夫**
（一般社団法人ワークショップ「き」組 代表理事）
写真 **奈良岡忠**

私たちは、現代の木造住宅を、昔からの木組の技術を使い、日本人の暮らしや風景に溶け込むようにつくりたいと考えています。そのためには身近な山の木を使い、伝統的な大工技術を駆使することが大切です。「山と職人と住まい手をつなぐ」三者協働の仕組みはそこから生まれました。山に植林できる費用を還し、職人に腕をふるってもらえる共存共栄の仕組みです。かといって建築費が高くついては、多くの住まい手に木組の家を提供できません。

そこで考えたのが、もっとも費用のかさむ「架構」の整理です。まず、山から伐り出してくる木の規格寸法に逆らわずに架構を考えること。そうすれば価格の明快な乾燥材がいつでも手に入ります。それらを柱、梁として門型フレームをつくり、2間おきにかけます。4間×4間のキューブタイプと3間×6間のリニアタイプがあり、伝統の仕口や継ぎ手を厳選して加工し、丈夫な架構をつくります。さらに架構と間取りを合致させれば木材の無駄もありません。総2階にすれば、費用を抑えながら広さも確保できます。伝統的な継ぎ手や仕口に足固めや貫（ぬき）を使っていますから、地震に粘り強く、組んでからでも外すことが可能です。「梯子のように組み、籠のように編み、柳のように粘る」構法は、日本に数多く残る古民家の架構に学んだ長寿命の工夫で、移築や再生にも向いています。

都市部の狭小敷地で、条件の厳しいところに実現した「小竹の家」も、前述の木組でつくられた家です。

架構は、長方形の敷地に沿ったリニアタイプで、2階の個室を広くとるために、2階の床を1階よりもせり出させる「せがい造り」という構法を採用しました。建物の顔と玄関庇を兼ねたファサードとなっています。

ワークショップ「き」組のつくる家は、天然乾燥の国産材を使った木組の家です。内装は、調温湿作用のある漆喰壁と無垢の床板です。自然素材の断熱材と、通気構法により、夏涼しく冬暖かい木組の家を実現します。民家のような美しいプロポーションと、暮らしやすい室内環境を実現する、飽きの来ないスタンダードなデザインです。

上/架構と間取りの合致した無駄のない室内空間。下/せがい造りの外観。2階床の梁を張り出して空間を確保しつつ庇をつくる。

上左/土台と足固めはベタ基礎にアンカーボルトで緊結している。フリーにすることも可能。上右/柱が小屋梁を受け、その上に軒桁が載る折置き組（おりおきぐみ）。下/門型フレームによる建て方。

**まつい・いくお** 1955年福井県大野市生まれ。77年東京藝術大学美術学部卒業、79年同大学大学院美術研究科修了。現代計画研究所入社。85年松井郁夫建築設計事務所設立。92年まちづくりデザイン室併設。現在、内閣府地域活性化伝道師、同省大工育成塾講師、金沢美術工芸大学非常勤講師。『木造住宅【私家版】仕様書 コンプリート版』（共著、エクスナレッジ刊）、『「木組の家」に住みたい！』（彰国社刊）、『「木組」でつくる日本の家』（農文協刊）など著書多数。

松井郁夫建築設計事務所
東京都中野区江原町1-46-12-203
tel 03-3951-0703 fax 3-5996-1370
E-mail ok@matsui-ikuo.jp
http://www.matsui-ikuo.jp

一般社団法人ワークショップ「き」組 http://kigumi.jp/